

エベレスト・サウスピラーの登頂

本郷三好

登山概要

登山隊の名称 愛知学院大学エベレスト登山隊1994

連絡先 〒465 名古屋市名東区勢子坊2-1108

湯浅道男方

目 標 ①エベレスト南稜(サウスピラー)ルートからの登頂

②環境保護活動 ほか

結 果 隊員3人, シェルパ7人の合計10人が登頂に成功

メンバー

		役 割	年 齢	性 別 (男, 女)
橋本龍太郎	はしもと りゅうたろう	名誉総隊長	56	男
湯浅 道男	ゆあさ みちお	総 隊 長	56	男
寺西 申生	てらにし のぶお	登 山 隊 長	52	男
本郷 三好	ほんごう みつよし	登 攀 隊 長	42	男
石川 富康	いしかわ とみやす	登攀リーダー(装備)	57	男
鈴木 清彦	すずき きよひこ	登攀リーダー(会計)	37	男
浜谷 光安	はまたに みつやす	登攀リーダー(食料)	37	男
高村 真司	たにむら しんじ	食 料	33	男
藤田 元弘	ふじた もとひろ	酸 素	33	男
熱田 渉	あつた わたる	輸 送	27	男

浜田 好子 はまだ よしこ 健康管理隊員 女

石川 保典 いしかわ やすのり 報道隊員 男

他, 環境保護隊・学術隊員26人

サーダー 第1 Lhakpa Tenzing (55) 第2 Pemba Nurbu (43)

高所ポーター Nima Dorjee (38) Nima Temba (37) Na Temba (40) Dawa Tashi (30)

ほか11人

連絡官 Sagarraj Acharya サガラ アッチリー

1. 登山記録

行動概要

- 1 / 4 橋本名誉総隊長，湯浅総隊長は最終ブリーフィングのためカトマンズ入り。
- 2 / 15 本郷，高村，熱田の登山隊員3人と環境保護隊員4人は名古屋空港より香港経由カトマンズ入り。
 - 22 藤田カトマンズ入り。
 - 26 鈴木，浜谷カトマンズ入り。
- 3 / 1 登山隊員最後の石川カトマンズ入り。
 - 11 先に入山していた環境保護隊（堀江，宮野，洲鎌）の3人が，アイランドピークに登頂。
（今春18隊入山するも成功した隊は2隊のみ）
 - 17 環境保護活動，順化活動をかねた登山隊はアイランドピーク登頂を試みるも，強風の為撤退する。
 - 23 石川，鈴木，高村，熱田がBC入り。
 - 26 藤田がBC入り。
 - 28 本郷がBC入り。BC（5,400m）建設。
- 4 / 2 C 1（6,050m）建設。
 - 7 C 2（6,680m）建設。
 - 18 C 3（7,600m）建設。
 - 23 C 4（8,100m）建設。

25～5 / 2まで 鈴木，高村，熱田は休養でデボチェに降りる。

 - 30 西尾環境保護隊長と学術隊員3人がBC入り。
- 5 / 2 湯浅総隊長が最終アタック態勢の協議・決定のためロプチェ入り。寺西隊長，本郷登攀隊長，サーダーを交え徹夜で協議。
 - 3 寺西隊長，中日新聞石川記者ほか支援隊員4人，浜谷がBC入り。
 - 4 鈴木，熱田がBCを出発～C 2入り。
 - 5 鈴木，熱田は強風の為C 2に滞在。高村がBCを出発～C 2入り。
 - 6 鈴木，熱田はC 3入り。
 - 7 鈴木，熱田はC 4入り。
 - 8 鈴木，熱田，シェルパ4名が10時20分登頂。石川はC 1入り。高村は不調を訴えたためC 2より下降する。
 - 9 鈴木，熱田はC 4からC 2。石川はC 2入り。藤田がBCを出発～C 2入り。
 - 10 鈴木，熱田はC 2よりBC着。石川，藤田はC 3入り。
 - 11 石川，藤田はC 4入り。藤田はC 2に戻る。

1. 登山記録

- 5/12 石川, C4で強風のため動けず。
- 13 石川, シェルパ3名が8時30分登頂。C4に戻る。
- 14 石川はC4よりC2着。
- 15 石川はC2よりBC着。
- 17 BC撤収。
- 30 全隊員帰国。

はじめに

1994年5月8日午前10時20分、愛知学院大学エベレスト登山隊は念願のエベレストサウスピラールートから隊員2人シェルパ4人を、5月13日、隊員1人シェルパ3人の合計10人を頂上に送り、同ルート下降に成功した。

念願とは、湯浅道男総隊長が自ら手塩にかけ育てた若きクライマーを世界最高峰の頂に立たせたい、それも最も難関なサウスピラールートからの登頂を目標に、半生をかけて指導してきたからである。実に21年目の実現であった。日本隊初の2ヶタ登頂者を送りだした登山隊でもあった。「夢」は必ず実現するということを実証した登山であった。以下は現地での活動を中心とした登山隊の報告である。

登攀活動

●ベースキャンプまで

先発チームより10日遅れて本隊がルクラ入り、すでに4,000mの高さまで高度順化を終えた現役部員(クープ合宿チーム)の強くなった姿に圧倒された。僕達は常に初めて到達した高度に泊まらない、という原則をもとにヒマラヤ登山を行ってきた。先発チームはこのことを忠実に守ってすでに4,000mの順化をすませ、ルクラで休息中だった。

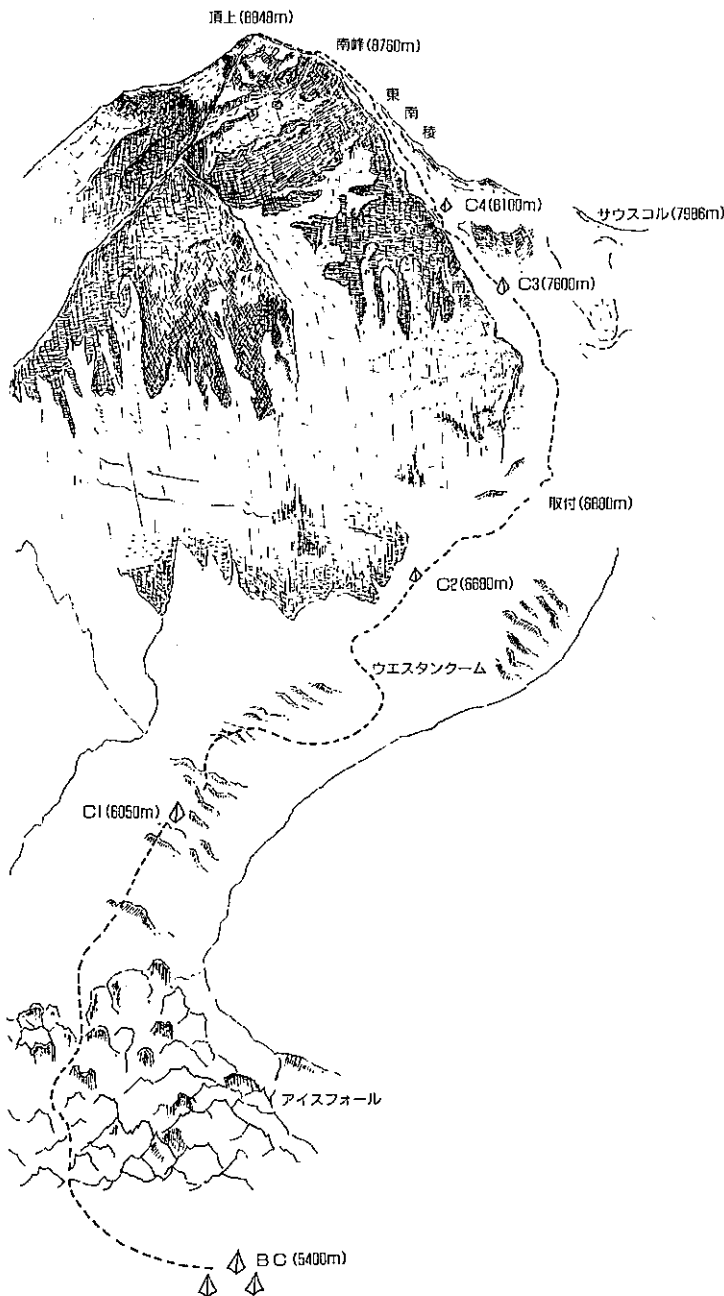
さて、ルクラからエベレストのベースキャンプへの道のりは、トレッカーの日程で約10日間だが、私達は3週間を費やした。

それは5,400mというベースキャンプ以上での高さで登山活動が順調に行うことができる「からだ作り」と、ヒマラヤ初体験の現役チームが、高度という障害を適格に乗り越えていくという2つの目的からだった。

ナムチェでは5日間滞在して、4,500mまでの順化。パンボチェでは3日間滞在して5,200mまでの順化、そしてチュクンに入りアイランド・ピークで6,000mの順化。パンボチェで3日休養してベースキャンプに入った。

これだけ慎重に順化を行ったつもりでも、ベースキャンプではちょっとした自己管理のミスから半数の隊員が不調を訴えた。咳を伴った喉の障害、発熱。高度順化は大胆に負荷をかけ、休息は繊細な気づかいをしなければならぬ。このバランスがちょっとした気のゆるみで崩れた結果であろう。

1. 登山記録



●C4 (8100 m)～頂上

大岩壁の基部を右側から回りこみながら3ピッチ雪壁を固定。さらに傾斜が落ちた40度位の雪壁を左上しながらミッテル工作、再び岩が非常に脆いので、ガリーをつめる。5ピッチ固定し、東南稜、南峰直下に向かってスタカットで登る。雪壁と岩のミックス帯。8500 m付近で東南稜に合流。南峰の登りは、スタカットで登る。以下は東南稜のノーマルと同じ。下山はヒラリーステップで使用したダンラインとメインロープを4ピッチ固定する。

ダンラインロープ5本、メインロープ (9 mm×45 m)、スノーバー8本、ロックハーケン7本

●C3 (7600 m)～C4 (8100 m)

岩壁と雪面のコンタクトラインを登る。傾斜は50度と変わらないが、氷壁から雪壁へと変わる。7900 m付近で韓国隊と思われるキャンプ跡から岩壁に入り、8ピッチでC4へ。大岩壁の基部、25ピッチ。

スノーバー15本、ロックハーケン40本、ダンラインロープ10本、ナイロンロープ15本

●C2 (6680 m)～C3 (7600 m)

小さいクレバスの多いウエスタンクームを6700 mの南稜下部の取付きまでつめる。雪が少ないうち取り付きの氷壁は、かぶり気味。以後18ピッチ平均50度の氷雪壁。C3直下の小さな岩壁になり4ピッチで乗り越しC3へ。

アイスクリュウ55本、スノーバー4本、ロックハーケン10本、ロープはすべてナイロン(10 mm)

●C1 (6050 m)～C2 (6680 m)

通称ウエスタンクーム

アイスフォールの規模が小さくはなっているとはいうものの、このウエスタンクームには、ほとんどラダーを使用しなくてもよいと思っていたが、実際には、まだまだアイスフォールの延長。ヌブツェフェイスの落ち口付近までに3 m ラダーを13本使用。

ナイロンロープ(9 mm～10 mm)300 m、スノーバー20本使用。

●BC (5400 m)～C1 (6050 m)

通称アイスフォール

フォールの中は、3 m ジュラルミン製ラダーを20台、キャンプ1直下(フォールの出口)には、上記のラダーを7連結。さらに5 m アルミ製ラダーを2連結、計29台使用。

アイスクリュウ30本、スノーバー50本、ナイロンロープ(9 mm～10 mm)1000 m使用。

1. 登山記録

●アイスフォールを越える

アイランド・ピークの順化トレーニングの意図はこの危険なアイスフォールの通過回数を少なくすることもあったが、最低3回はキャンプ1まで往復することにした。高所順応のためである。少しでも安全性を考えた意味で早朝行動の原則を厳守した。午前5時30分出発。タイムリミットは午前10時とした。それにしても我々のシェルパは強い。一番若いダワツエリ(23)は、15kgの荷上げを往復3時間40分。私たちはどれだけ頑張っても4時間30分だった。(3回目の荷上げでやっとシェルパさんと同じスピードとなった)

●ウエスタンクーム前進基地へ

今シーズンは僕達を含めて4隊がこのウエスタンクームに入山することになっているが、ここまではまだ他の3隊はベースキャンプにも入山してきていない。どこからか僕達が3月下旬に入山する情報を手にしたのだろう。このウエスタンクームまでは僕達が作ったルートを使用するらしい。

前進基地となるキャンプ2までのウエスタンクームの通過には、今シーズンは13台のハシゴを掛けた。エベレスト登山のこの間も早朝行動を厳守した。

●サウスピラー大氷壁へ

C2～C3までは、結果的に標高差1,000mのキャンプ間になってしまった。ルート工作初日、鈴木、熱田と3人のシェルパの合計5人でキャンプ2をスタートした。6,700mまではノーマルルートと同様セラック帯を登高する。南稜の末端付近は、傾斜の緩い雪壁なのでその地点を目指してどんどん登るが、途中上部からの落石の雨にあった。急いでトラバースし傾斜の強い氷壁の下のオーバーハングしたセラック帯の下に逃げ込んだ。90度近いこのセラックを越えるのはむづかしいが唯一落石から回避できるルートだと判断した。スノーシャワーに打たれ、全身雪まみれになり苦闘を続けて、午後4時までがんばったが結局2ピッチ(100m)固定できずにすぎなかった。マイナス20度を越えた気温の中でこの1日はストレスとともに疲れた。翌日はチームを入れ替えてルート工作を行った。幸い昨日の終了点から先は、多少傾斜が落ちたので10ピッチ延びた。しかし、まだ春の訪れを見せないこの壁の氷は固くシェルパ達のアイゼンは折れる一方だった。折れなかったのは唯一、わがカジタックスだけであった。

僕達はひとつのミスも許されないこの壁の工作には、荷上げは隊員もシェルパも1日行動、1日休養の短いローテーションで行うことを決めた。4ローテーション目でキャンプ3建設可能なスペースを岩稜と雪面との接点に確保することができた。高度7,600m、ローツエフエースのキャンプ3は目の下の位置だった。僕達は頂上へ行くために荷上げを含めて高差1,100mの壁の登下降を最低3回繰り返すことを決めた。そのことがこの先8,000mを越える高さで無酸素で安全に登下高ができることにつながると考えたからだ。ルート上の固定ロープの支点はすべて(スクリュー、ロックハーケン)3点、4点と強化した。

1. 登山記録

●キャンプ4建設

氷壁は雪壁となり傾斜も少し落ちた。それでも岩稜とコンタクトラインを離れず忠実に辿った。ルート工作は2日間で終え、キャンプ4の位置も大岩壁の基部に設定をした。

隊員もようやくシェルパのスピードに追い付いてきた。7,000mを越えた高さでの順化はあり得ないといわれるが、わが隊員が、無酸素でシェルパのスピードとさほど差がなく荷上げができたのはキャンプ2、キャンプ3間の大氷壁での行動を大切にしたからではないかと思う。

第4キャンプへは、スノーバー、アンザイレン用8ミリロープ、固定ロープ（ダンライン）3日分の高所食、そして、2ℓ（210気圧）の酸素ボンベを30本上げた。

●アタック体勢完了そして休養に

アタックを残すのみとなった。ベースキャンプに下り、第一次登頂隊員はさらにディボチェ(3,700m)まで下り休養をとることにした。ここまでの30日間は過酷であった。最低マイナス26度～30度でのルート工作、荷上げ、気合いは充実していてもからだはやはり衰退しているからだ。思い切って緑が多く、暖かいディボチェを選んだ。なによりも標高が低い(3,700m)というところが決定の要因だった。

3,700mの休息地は快適だった。よく食べれ、よく寝れ、自分のからだのみをみているのが感じられるほどだった、と鈴木、高村、熱田は異口同音に語った。付き添う浜谷の助けを借りて3人は眠りに眠った。そして何よりも心の支えになったのは湯浅総隊長、寺西隊長と合流できたことだった。まったくの偶然だった。いろんなことをいっぱい話しをしたそうだったが、唯一記憶に残っている会話は、「集中できるか?」「ハイ」「調子はどうか?」「バッチリです!」「頂上にいる自分の姿をイメージしろ!」ただそれだけだった、という。以下、鈴木に登頂日の行動記録を添えて、本報告の責めを果たすことにしたい。

登頂へ（鈴木清彦 記）

8,000mを越えた世界。この高度気の遠くなるような次元の世界を克服するには非常な注意力と集中力を発揮しなければならない。2人ともここまでは十二分に発揮してきた。あとは8,848mまで持続させればいいのだ。熱田は初めての8,000m峰がエベレストということもあってか、プレッシャーだろう、少々下痢気味なようだ。

特別に緊張しているわけではなかったが眠れなかった。5月7日午後11時からシュラフから出て準備にかかる。この高さの世界では何事もスムーズに行えない。準備に2時間を費やし5月8日午前1時第4キャンプを出発する。昨日8,300m付近までルート工作をしておいたので順調に高度を稼ぐ。固定ロープの終了点でアンザイレンをする。ヘッドランプの明りを頼りにガリーから雪壁へとくり返し「じわり、じわり」と攀じる。途中のテラスで2つの遺体（おそらく昨シーズン東南稜からスリップしたと思われる）を横目で眺めながら午前5時南峰下の8,500m付近で東南稜と合流する。

1. 登山記録

傾斜のない稜線のモナカ状の雪のラッセルに苦勞する。南峰の急登に差し掛かるまでのこの作業はとても苦しかった。南峰への岩と雪のミックスした岩稜を忠実にスタカットで攀じる。午前8時南峰に着く。休みたい気持ちを抑えてヒラリーステップの見えるところまで動く。最後の難関を早く自分の目で確かめたかった。

ヒラリーステップは思っていた通り岩が露出していた。5m程のチムニーを越えるのに30分程費やしたろうか、結局帰路を考えて100m固定ロープを張った。約1時間費やしヒラリーステップを越え、最後の頂上稜線を一步一步進む。まるで“カタツムリ”のようなゆっくりとしたピッチで。ついに稜線の最後のふくらみが近づいてきた。頂上のアルミのポールも見え最後の登路がはっきり認められた。頂上まであと20m、もう間違いなかった。あと何分かでエベレストの頂上に、世界の最高峰に自分が足跡を印すとは信じられないような気持ちになった。頭の中は真白な状態で頂上に足を踏み入れた、と同時にマスクをはずした。何よりも世界最高峰の自然の空気を早く味わいたかった。10分後に熱田が着く。多くのことを会話する必要もなかった。力いっぱい握手をし互いの顔を見ればそれで充分だった。

僕達が今シーズンのエベレストの頂上に立つ最初のパーティーである満足感と、今までのすべての遠征の中で最も幸福なこの瞬間と、この気分を何よりも誰よりも早く湯浅先生に伝えたい気持ちでいっぱいだった。

登頂後記

私も力一杯登山をした。しかし、エベレストという大きな山に登攀隊長自ら登頂する夢を果たすことはできなかった。しかし、とにかく、大学山岳部として初のエベレスト登頂、3つ目の8,000m峰登頂を完遂することができたことに満足したい。でも、私は生涯登り続けていきたい。57歳の大將の（石川富康隊員の愛称）エベレスト登頂という身近なお手本がある。そして胸を張っていま報告書にとり組んでいる。それは「本郷、君は凄いヨ、登攀隊員以外の支援隊トレッカーを含めて37人を無事故でキチンと指揮した能力、そしてシェルパさんを隊員と同じ立場で登山をした人間性！本郷だから出来たんだヨ」という帰国第一声の橋本名誉総隊長と湯浅総隊長の言葉が深く胸にきざみこまれているからだ。

(サガルマータ・サウスピラー登攀隊長)